

# 世界を拓げるといふことは

會田 天

私は中学生の時に、ハリーポッターシリーズだけで三周するほど本が好きでしたから、ある日父親が買って来た思いがけない一冊にも飛び上がって喜びました。えんじ色の絹で装丁された、二色刷りの美しい本。それが人生の愛読書である『はてしない物語』との出会いです。著者であるミヒヤエル・エンデの代表的な著書はほかに『モモ』があり、それら2冊は京都外国語大学付属図書館に所蔵されていますので興味のある方はぜひ読んでみてください。読み終わるころには、本の紹介をしようというのになぜ私が少しもあらずじに触れなかったのかをよく理解していただけたと思います。

最近になって『はてしない物語』を5年ぶりに読み返す機会を得たのですが、当時の私が漠然と感じた、哀愁ともとれるような喪失感の正体がわかったような気がしました。私はエンデが、子供から大人への“成長”を悲しい目で捉えているのだと感じたのです。

『はてしない物語』や『モモ』には子供から大人への成長を揶揄するような表現、忘れていた子供時代を思い起こさせるような会話、一見つかみどころのない友情という感情の芯に迫るストーリー、そういったものが随所に見られます。そして私が感心したのが、どれも決して否定的な描かれ方をされていないということです。つまりそれは子供達にとって童話のような説教っぽさがなくて読みやすく、同時に大人達には自分のしてきた生き方や考え方、犠牲にしてきたものや捨ててきたもののことをもう一度考えろと諭すような力強さを持っているということです。そして彼の作品は腕の中で深い後悔に咽び泣くことをも許容してくれる、そんな暖かささえ持ちあわせています。

何年もかけて身体が成長するうちに、心も自然と成長を遂げるもの。大人は時間をかけて知識や経験をどんどん積み上げてきたというだけで、誰しもかつては子供だったのですから、その表皮を剥いでいけば根底には必ず子供だった頃の自分があるはず。でも果たして本当にいるのでしょうか？『もう大人だから』と必死に生きるうち、いつしかいなくなって然るべきなのではないでしょうか。自分の世界を拓げようと躍起になるあまり、かえって狭めることになってはいないでしょうか。幼い頃に感じたことや経験したこと、考えたこと、想像したこと、大人になるためにはそれら一切を捨てなくてはならないのでしょうか。どうにかして、子供であった時の自分を心のうちに宿しつつ大人になることはできないものではないでしょうか。

“本は誰も見たことのない別世界への扉である”これは私が『はてしない物語』の主人公、バスタンの言動から着想を得た考え方です。読む者ひとりひとりの考えや経験が異なりますから、それらに呼応した本にいざなわれる世界もひとりひとり異なるものです。つまるところ、私が本に手を引かれて訪れた世界もまた作家の住んでいた世界とは完璧に違いますし、そこから学んだり考えたりしたことというのは自分だけの宝物です。

私は19歳です。もう子供とはいえません。だからこそ褒め言葉として以外に「大人だね」と言われることがないよう、この広い世界をのびのびと生きていきたいものです。

あいだ あまね（フランス語学科1年次生）